

ヨーロッパは狭い。

ハンガリー/ブタペストからドイツ/フランクフルトまではあっという間だ。

ちょっとお高いルフトハンザを選んだのは訳がある。

1 つはテロ対策。ドイツは、テロがあっても容赦しない、妥協しないという方針を打ち出しており、結果としてハイジャックが起こりにくい(らしい)。でもいったん起こったら怖いけど。

もう1つは、日商岩井時代にお世話になった先輩を訪ね、またお世話になってしまおう、という為だ。日商岩井の駐在員事務所は、他商社と同じ様に、金融の街フランクフルトではなく、デュッセルドルフにある。

デュッセルドルフは日本人が多くいる街として有名だ。何十年も前、北に位置するルール炭田の石炭を買い付けに日本の鉄鋼各社が進出。当然商社がお供をする。そして商社が来ると、他の産業も付いてくる。そうすると益々商社が必要になって...、という循環で、何時の間にか日本企業が集まったそうだ。ガンダムのプラモデルで有名な田宮模型までも、ここに駐在員事務所を開いている(高校の時の友人が駐在していたのだけど、こんな街なら駐在のし甲斐がありそう)。

ドイツの新幹線

フランクフルトからデュッセルドルフまではICE(“International City Express”)と呼ぶ、日本の新幹線みたいなやつで1時間半ほど。

どうも在来線と同じ路線を使用しているようだ。時々、街中を突っ走っていく。

のぞみ号の様には揺れない。それでいてスピードは254キロを指していた。さすがドイツ。

因みに値段は、往復割引で113.20ユーロ(15,169円)。新幹線で東京から豊橋辺りを往復する事を考えるとあまり日本と変わらないかもしれない。

ただ、為替のマジックがある。最近はユーロがむちゃくちゃ上がっている。円も上がっているが、そのペースはユーロに及ばない。11月上旬のフィンランドでは1ユーロ131円だったのが、今は134円になっている。昔は110円程度だったから2割も高くなってしまった。ヨーロッパを旅する日本人とアメリカ人は結構辛い。

列車は、1分の後れもなくデュッセルドルフに到着(さすがドイツ)。因みに、この列車はこのままオランダまで行くそうだ。

デュッセルドルフの街

駅を出て、日本人街として有名なインマーマンストリートを歩いてみて驚いた。歩いている人の割合が、ドイツ人と日本人で同じくらいなのだ。耳を澄ますと日本語が聞こえる。店を見ると日本語の看板だ。最初、全く違和感なく受け入れてしまっていたが、『あれっ、確かここはドイツ』と思ったほどだ。

何でもロンドン、パリなどに次いで日本人が多い街(6,000~8,000人)らしいが、狭い町なので人口密度から言うと一番らしい。

日本の本が買える本屋さんが、200メートルの間に3軒もあった。活字に飢えていた私は荷物を抱えたまま早速入り浸ってしまう。そしてもうあと数日で帰国するというのに本を買ってしまった。因みに値段は日本の定価の1.5~2倍。とても高くつくのだが、致し方ない(実は後で古本屋

さんの存在を知った)。

本屋さんの経営者はもちろん日本人。客も日本人。

日商岩井の事務所がどこにあるのかわからなかったので、列車を降りた時に困ったなあと思っていたが、何とこのデュッセルドルフでは、日本語で道を聞く事ができる街なのであった。

日本食材を売る店も多い。海外で日本食材店といえば、醤油、味噌、カレー粉、せんべい、日本茶、日本酒...と大体は置いてあるアイテムの相場が決まっている。ジャカルタのソゴウでさえも、置いてある日本食材の種類は数十品目だった。

しかしここデュッセルドルフの日本食材屋さんは半端じゃない。だしの素、カップ麺、レトルト、漬物の素、お菓子各種、とうふ、刺し身、スーパードライなど、何でもございだ。

日本ではなかなか見ないようなマイナーな食材まで売っている。お店もコンビニの2~3倍の面積があるので、へたをすると日本の田舎よりも物が揃ってしまうかもしれない。



日本の食材に韓国の物が混じって並んでいる。レジに行くとハンゲル語なまりの日本語で対応してくれた。

実は日本食材店の方は、韓国人が経営するケースが多いらしい。

よく海外で言われるのは、日本人は根づかずに駐在員として3~5年程度で日本に帰る。でも韓国人はその街に移り住んで勝負を掛ける、というスタンスの違い。結果として、海外の個人商店やカラオケ等は韓国人経営が多い、という事だ。

その話を裏付けるように、デュッセルドルフの食材屋さんでは韓国人経営者が多かった。

日本食材屋さんの中に、レンタルビデオ屋を発見。

500本近くのビデオが有りそう。主に日本のテレビ番組である。NHKだけでなく、民放の番組も多い。そして割と最新のドラマなどがある(私の旅が長いせいか、全く知らないものも多い)。恐らく日本から空輸されてきているものなのだろう。

実は私、NHKの朝の連ドラが大好きなのだ。でも、見逃す事も多いし、15分だけでは物足りない。もっと確実に、そしてまとめてみたいといつも思っている。

こんなサービスが日本にもあれば、それが叶えられるのになあ。



著作権ってどうなっているんだろう？ レンタル料がちょっと高い気がするけど...

この他にも、日本語 OK の雑貨屋さん、電気屋さん、定食屋さんなどがこのインマーマンストリートに集まっている(焼き魚定食(7 ユーロ(938 円))なんて、もう完璧に日本の味。美味い味噌汁を 5 ヶ月ぶりに頂きました)。

かつて岩崎宏美が、三菱商事の旦那さんと共にこのデュッセルドルフに来たものの、「こんな街には住めない」と逃げ帰ったと聞いた事がある。でも全然問題ないと思うけどなあ。

ドイツらしいもの

ドイツと言えば、哲学と文学である。

と書き出すと、これ以上続かないので、やはりここはビールネタ。

高いユーロのお陰で、あらゆる物が高いドイツであるが、目を見張るほどギャップを感じるのがビールの値段。

スーパーに行くと、500 ミリリットルの瓶で、例えば 0.59 ユーロ(79 円)という値段で売られている(ただしビール瓶のデポジットが 0.02 ユーロ(11 円)追加されるが)。

これまで、ロシアやルーマニア、ポーランドなど、ビールの安い国を旅してきたが、その国の物価との比較ではもちろんの事、絶対的な金額でも安いかもしれない。ユーロが安い時には一体どうなっていたんだろうなんて思ってしまう。

ただ、さすがドイツ。スーパーにおいてあるビールは、ことごとく“瓶”だ。あるスーパーでは“缶”ビールなんて一本も置いてなかった。そして日本の様に、冷やして売ってはいないところが私には今一つ。しかし、これもきっと地球環境を考えた配慮に違いない。スーパーで大量に買っても家庭では冷蔵庫に入らないだろうから。

当然ながら、ビールは至るところに置いてあるので至るところで飲んだ。

ドイツでは、各街ごとにその街独自のビールがあるらしい。デュッセルドルフではアルトと呼ばれる種類のビールである。日本で良く飲まれるピルスナーよりは色が濃く、味も少し濃厚。ただ日本の田舎で良く出てくる地ビールのアルトなんかよりは、断然軽くて飲みやすいものだ。

お店で飲むと、お店の格により値段はまちまちだが、私の通った店は 1 杯=1 パイント(473 ミリリットル)で、3~4 ユーロ(402~536 円)。瓶ビールに比べると高いのだが、もう味は絶妙でたまらない。これが夏だったらたいへんな事になるだろうな、きっと。



これぞビールバブのオヤジ！って感じてました。客よりも自分の方が速いスピードで飲んでしまうところが怖い。

しかし実は、現在ドイツでは若者を中心にビール離れが進んでいるのだそう。ビールの代わりにワインらしい。その気持ち、私には全く理解できないが、実はドイツではワインも安い。スーパーに行くと、1 本 2 ユーロ(268 円)から売っている。ドイツワインももちろんあるが、安ワイ

ンはフランスやイタリアの物が多い。

口直しにワインも飲むが、確かにこれも実に美味しいので困った事になるのだった。
宿泊しているユースホステルがアルコール禁止でなかったのは幸運だ。

デュッセルドルフの街並み

デュッセルドルフにいる間、毎日雨が降っていた。はっきり言うと、こんなヨーロッパは嫌いだ。あまり寒くはなかったが、雨が降ると、ドイツの街並みもぱっとせず、今一つ。

例えばライン川。高校の地理の教科書に出てくるほど有名な川である。国際船が忙しく行き来している。その左右には、手入れの行き届いた芝生が遥か彼方にまで広がっている。そしてその向こうには中世の街並み…。

これ、夏の快晴だったらすごく絵になるはずの写真である。

でもこの日は、どす黒い雲に覆われている上、撮っている私も強風と雨の吹きつける橋の上において全然気分が乗らないのだった(やっぱりヨーロッパは夏ですね)。



各国の国旗を付けた船が行き来するライン川。多摩川よりもちょっと大きいくらいなので意外だった。

デュッセルドルフの街並みで気になった事がもう1つ。これは天気とは関係ないが、さすがドイツ、車が多いのだ。規律を守るはずのドイツ人も、歩道やコーナーまで駐車している。せっかくの中世の街並みが台無しになっている。クリーム色に統一されている区域があり、住居の壁がどの家も調和していてとても綺麗なのだが目線を落とすと、いろいろな色の車が全体を台無しにしているのだった。



当たり前なのかもしれないが、ベンツも一般的な乗用車の様で、普通の住宅の道路に普通に停まっている。

車も多いが、自転車も多い。こちらは好感が持てる点。どこへ行っても自転車専用のレーンがきちんと決められている。日本のように背後から迫る車に脅えなくても良い様にできている。今まで東欧を回ってきたので、このような粋なものは一切なかったが、さすがドイツだ。

クリスマスの準備

11月の後半ころから、ヨーロッパでは、だんだんとサンタの登場が多くなり、クリスマスツリーが飾られる。

そうそうサンタと言えば、1つ問いかけ。『サンタクロースはいつ来るのか?』

以前、ライブレポートで『見た事ないよこんな果物』と書いたが、あっさりと『ざくろ』だった

事で、私の常識感の無さが露呈してしまった事があった。今回ももしかすると二の舞いかもしれない。でも正直言って全く知らなかったので書いてしまおう。

何とヨーロッパでは『サンタクロースは12月6日に来る』のだ。12月24-25日では無いのだ。そして『クリスマスプレゼント』とは、主に『親』がくれるもので、サンタクロースが靴下の中に入れてくれるのはただの『プレゼント』らしい(しかもスモールプレゼント)。

最初、ハンガリーにいた時にそう言われ、こりゃー担がれているのだろうと思ったが、どうもドイツ人にも聞くと、それは正しいと言うではないか。12月6日は何とかデー(忘れた)で、その日にサンタはやってくるらしい(その割に、その日が過ぎても、サンタは堂々と飾られているけど)。

12月6日にヨーロッパで仕事をし、12月24日に日本に来るとなると、トナカイの馬車は、時速18キロという事になる。案外遅いもんだ。

さてデュッセルドルフのクリスマス、というかドイツ、というか、恐らくヨーロッパ中でそうなのだろうけど、クリスマスが近づくと、街中にクリスマスマーケットというのが登場する。

クリスマスのデコレーションを売る店を中心に、ちょっとした食料やパン、ソーセージ、ビール、ホットワインなどの臨時のお店が軒を連ねる。デュッセルドルフの場合、200軒近くあったと思う。広場にはアイススケートリンクまで登場。ミニ機関車が子供を乗せて露地を走る。市民グループによる音楽隊まで登場し、場を盛り上げる。この日は日曜日だった事もあり、ものすごい盛況だった(クリスマスイブのお台場よりすごい)。

ヨーロッパにとって、クリスマスはやはり最大のイベントなんだなあと今更ながら感心してしまった。

たぶんつづく



クリスマスマーケットに飾ってあるツリー。どっから持ってきたのか、というほど大きい。



売っているのはホットワインとビール。こんな雰囲気飲むとまた美味しいんだな、これが。



写真で見ると以上に、ものすごく小さいリンクなのだけど、順番待ちが出るほど盛況。